

児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を 育成する外国語活動の工夫 ～単元を通したスキットづくり活動～

那覇市立大名小学校教諭 金城 里子

＜研究の概要＞

これまでの外国語活動を振り返ると、単元ごとに言語材料や表現が変わるため、それらをつなげて会話を広げさせることが少なかったと感じている。

そこで、児童が学んだ英語を生かして、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するために、単元を通したスキットづくり活動を実践し、検証した。

その結果、児童はこれまでに学んだ英語を駆使してスキットをつくり、積極的にコミュニケーションを図ることができた。

＜研究のイメージ＞



＜研究の成果＞

スキットづくり活動を通して、児童は英語で自分の思いを伝える喜びを味わい、学んだ英語が使える実感や自信をもつことができた。そのことが次の活動への意欲につながり、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成された。

また、スモールステップでスキットづくりを行うことで、児童は無理なくこれまでの学びを生かしたスキットをつくることができた。

目 次

I	テーマ設定の理由	53
II	研究目標	53
III	研究仮説	53
1	基本仮説	
2	作業仮説	
IV	研究構想図	54
V	研究内容と方法	54
1	小学校外国語活動について	
2	積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度について	
(1)	積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度とは	
(2)	積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するには	
3	スキットづくりについて	
(1)	スキットづくり活動とは	
(2)	スキットづくりの方法	
(3)	Can-Do カードについて	
VI	授業実践（第6学年）	57
1	単元名“What time do you get up?”（『Hi, friends! 2』Lesson 6）	
2	単元の目標	
3	指導計画（全5時間）	
4	授業仮説	
5	本時の展開【5／5時】	
VII	結果と考察	58
1	スモールステップでつくったスキットの実際から	
2	検証授業及びアンケートから	
(1)	検証授業から	
(2)	アンケートから（22名）	
3	抽出児童の変容から	
VIII	成果と課題	60
1	成果	
2	課題	

《主な参考文献・引用文献》

児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を 育成する外国語活動の工夫 ～単元を通したスキットづくり活動～

那覇市立大名小学校教諭 金城 里子

I テーマ設定の理由

国際化の進展に伴い、異なる文化との共存や国際社会に貢献できる日本人の育成が求められ、学校教育で外国語教育を充実することは重要な課題の一つとなっている。それを受けて、平成23年度より全国の小学校で外国語活動が実施されている。

本学級の英語実態調査（平成26年10月実施）では「外国語活動が楽しい」と答えた児童は9割を超えた。しかし、その中でコミュニケーションの楽しさを理由に挙げた児童は約2割だった。また、「現在の単元で、これまでに学んだ表現を使っているか」の質問では、約6割の児童が「使っていない」と答えた。これは外国語活動が、決められた言語表現のパターン・プラクティスになっていることが多く、これまで学んだことを生かしてコミュニケーションを楽しむ体験が十分ではなかったためだと考える。

小学校学習指導要領解説外国語活動編では「児童が使える英語を駆使し、さまざまな相手と互いの思いを伝え合い、コミュニケーションを図ることの楽しさを実際に体験することが大切である」と記されている。そこで外国語活動の時間において、児童がスキットをつくる活動を行い、これまで学んだ英語表現を駆使してコミュニケーションを図る楽しさを感じさせたいと考える。英語で自分の思いを伝える喜びやそれが伝わった自信、達成感が次のコミュニケーションへの積極的な態度につながるであろう。

以上のことから、外国語活動の時間において、単元を通したスキットづくりの活動をスモールステップで行えば、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成され则认为、本テーマを設定した。

II 研究目標

外国語活動の時間に、児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するために、単元を通してスキットをつくる活動の工夫について研究する。

III 研究仮説

1 基本仮説

外国語活動の時間に、単元を通してスキットをつくる活動を行えば、児童が使える英語を駆使して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されるであろう。

2 作業仮説

外国語活動の時間において、本時で学んだ英語表現をもとにスモールステップでスキットをつくる活動を行えば、英語で伝え合う楽しさや達成感を味わい、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されるであろう。

IV 研究構想図



V 研究内容と方法

1 小学校外国語活動について

直山(2013)によると小学校で育むコミュニケーションの素地とは『日本語や日本の文化を含む、様々な言語や文化に対する興味関心の高まり、言葉の豊かさや面白さへの気づき』『(中略)自身が持っている外国語の知識を総動員して相手を理解しようとする、また、相手になんとか伝えようとするコミュニケーションへの積極性』『活動で用いている外国語の語彙や表現を聞いたり、言ったりすることを通しての外国語への慣れ親しみ』が相まったもの』としている。以下は小学校外国語活動の目標の3つの柱である。

- ①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ。

2 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度について

(1) 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度とは

小学校学習指導要領解説外国語活動編（平成 20 年）（以下、解説外国語活動編）によると、コミュニケーションへの積極的な態度とは「日本語とは異なる外国語の音に触れることにより、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしながら、積極的に自分の思いを伝えようとする態度など」のことである。

(2) 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するには

「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を育成するためには、まず実際にコミュニケーションの楽しさを体験させることが大切である。そこで解説外国語活動編 2 内容(2)では、コミュニケーションに関する事項として次の 3 つの指導内容が設けられている。

- (1) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
- (2) 積極的に外国語を用いたり、話したりすること。
- (3) 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。

また、影浦（2008）は「これからの英語は、語句、文法、構文、表現等を使いながら身に付けるという考えに切り換える必要がある」としている。限られた言語材料であっても、それを可能な限り使うことで、児童は伝わる喜びを味わい、コミュニケーションの楽しさを感じることができると考える。英語が使えたという自信や達成感は次のコミュニケーションへの積極的な態度につながるであろう。本研究において「英語が使える」とは、「これまでに学んだ英語を場面に応じてコミュニケーションの場で活用できること」と捉える。

さらに、岡・金森（2011）は「パターン・プラクティスによって異なる文を次々と間違いなく言うことができても、それが児童の表現したいことでなければ、本当の意味での自己表現にはならず、コミュニケーション能力の育成には結びつかない」と述べている。そこで、外国語活動の時間に、これまで学んだ英語を駆使し、児童が表現したいと思うようなコミュニケーション活動を設定する必要がある。

3 スキットづくりについて

(1) スキットづくり活動とは

スキットとは、『小学校英語活動実践の手引き』（文部科学省）によると「物語や日常のやりとりの劇化であり、英語で自己表現をねらうもの」である。

本研究のスキットは、決められた台詞はなく、スキットの内容を児童が考え、表現する。自分の経験や生活に即した会話のやりとりを考えるため、より児童に身近で現実的な会話となり、積極的に自分の思いを伝えようとするコミュニケーション能力の素地が育まれると期待できる。

また、児童は、場面と表現を結びつけて英語の意味を理解していることが多いと考える。スキットづくり活動において、児童はこれまで学んだ英語が他の場面でも使えるかを思考し、判断するであろう。児童が、与えられた場面で様々な表現を考えることで、コミュニケーションの場面と表現がより広がり具体的に理解されると考える。

さらに、自らが話したいことを話すために、本時で扱う語彙や表現のみでなく、これまで学んだ語彙や表現を活用し、スパイラルに英語に慣れ親しませることがで

きるであろう。そのことが英語が使えるという自信につながり、次のコミュニケーションへの積極的な態度となると考える。

つまり、スキットづくり活動は、児童が今まで学習してきたことを活用できる場であり、自らが考えて英語を使う場として位置づけられる。

(2) スキットづくりの方法

現在、外国語活動では『Hi, friends!』（文部科学省）を使用している。本研究は、単元の枠組み（Lesson のテーマ、時間数、言語材料）はその年間指導計画に基づくものとし、各時間の後半にスキットづくり活動を 10 分程度設定する。表 1 はスキットづくり活動の基本構想である。スキットづくり活動では、示された表現を基に新たに表現を加えてスキットをつくる。スモールステップで進めることで使える英語表現が増え、スムーズに会話を広げることができると思う。

表 1 スキットづくり活動の基本構想

	形態	スキットづくり活動の内容
第 1 時	一斉	本単元の表現を使った 1 往復程度の会話のスキットをつくる。
第 2 時	一斉	前回のスキットに 1～2 文程度加えたスキットをつくる。（Can-Do カードの活用）
第 3 時	グループ	場面を限定し、グループでスキットをつくる。（Can-Do カードの活用）
第 4 時	グループ	本単元の表現を使用する必然性のある場面を考える。
第 5 時	グループ	グループで設定した場面のスキットを完成させ発表する。（Can-Do カードの活用）

(3) Can-Do カードについて

Can-Do カードとは、「英語を用いて何ができるか（Can-Do）という言語能力発達段階を表した自己評価法」であり、学習者をより意欲的に外国語活動に動機付けるためのものである。影浦（2010）は Can-Do テストについて「子どもが英語は『できる』という自信が強ければ強いほど英語が好きになるきっかけとなる」と述べている。そこで、那覇地区教育課程研究小学校外国語活動部会では平成 23～25 年度に 5 年生及び 6 年生用の Can-Do カードの作成（図 1）及び実践を行った。その結果、Can-Do カードは自らの英語力を自己評価するだけでなく、これまで慣れ親しんだ英語表現を振り返るものとして活用できた。

そのため、本研究でも Can-Do カードを活用し、これまでの外国語活動で学んだことを思い出す手がかりとして使用する。

また、Can-Do カードを教室に拡大して掲示し、日常的にこれまでの学びを振り返ることができる教室環境を整える。

Can-Doカード 6年

Lesson 8 「夢」をしよう

- 自分の将来の夢を発表することができる
- どんな仕事をしたかたずねたり、答えたりできる
- 英語で職業の名前を言える

Lesson 7 オリジナルの物語を作ろう

- 友だちとオリジナル劇をつくることができる
- 絵本の読み聞かせや友だちの劇を聞いてほしい理解できる
- 世界や日本の物語を 2 つ以上言える

Lesson 6 一日の生活を紹介します

- 友達の一日の生活を聞いてわかる
- 起きてから寝るまでのことを言える
- 外国（アメリカ等）が今、だいたい何時くらいかわかる

Lesson 5 友だちを旅行にさそおう

- 3 人以上の友だちに、「どこへ行きたいですか？」とたずねることができる
- 行きたい国とその理由が言える
- 2 つ以上の外国についてその国の食べ物や建物などを紹介できる

Lesson 4 道案内をしよう

- 「（病院）はどこですか？」とたずねることができる
- 「左（右）へ曲がってください」と聞いて、曲がることできる
- 英語で建物（学校や病院など）の名前を言える

Lesson 3 できることを紹介しよう

- 友だちに「〜できる？」とたずねることができる
- 自分のできることやできないことを英語で言える
- 友達のできることやできないことを聞いてわかる

Lesson 2 友だちの誕生日を祝おう

- 3 人以上の友だちに誕生日をたずねることができる
- 自分の誕生日を英語で言うことができる
- 外国の行事やお祭りの様子を家族に紹介できる

Lesson 1 アルファベットのクイズを作ろう

- 友だちに「〜持っている？」とたずねることができる
- クラスの人から英語で言える
- 「輪ゴム」や「生卵」がどこの国の言葉かわかる

平成 25 年度那覇地区教育課程研究小学校外国語活動部会（一斉改訂）

図 1 6 年生用 Can-Do カードの実例

VI 授業実践（第6学年）

1 単元名 “What time do you get up?”（『Hi, friends! 2』Lesson6）

2 単元の目標

- ・積極的に自分の一日を紹介したり、友達の一日を聞き取ったりしようとする。
- ・生活を表す表現や一日の生活についての時刻を尋ねる表現に慣れ親しむ。
- ・世界には時差があることに気付き、世界の様子に興味を持つ。

3 指導計画（全5時間）

	主な活動	スキットづくり活動	
		内 容	・スキットづくりの様子 ※教師の手だて
第1時	活動に準備する。 （『Hi, friends! 2』Lesson6）の	スキットをつくろう（10分）	・本時の使用表現を使ったスキットをつくる。 ※JTEとデモンストレーションを見せる。
第2時		みんなでスキットをつくろう（10分）	・前時のスキットに1～2文程度付け加えたスキットをつくる。 ※Can-Doカードで使える表現を確認する。
第3時		グループでスキットをつくろう（10分）	・本単元の使用表現をもとにグループでスキットをつくる。 ※場面を限定する。 ※Can-Doカードで使える表現を確認する。
第4時		場面を考えよう（10分）	・時刻を聞く（本単元の使用表現）必然性のある場面を考える。 ※グループで考えさせ、全体で共有する。
第5時（本時）		オリジナルスキットを発表しよう（28分）	・グループでスキットをつくって発表する。 ※Can-Doカードで使える表現を確認する。 ※友達のグループを見て、再考する時間を設ける。

4 授業仮説

グループでスキットをつくる場において、Can-Doカードで使えるような表現を示して確認すれば、既習表現を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されるであろう。

5 本時の展開【5／5時】（太枠はスキット活動の場面）

	児童の活動	学級担任	英語指導員	指導上の留意点 ○◎評価＜方法＞
導入 10分	1 挨拶をする。 2 <レビュー>「〇〇先生の一日を聞いてみよう」 3 <レビュー>動作と時刻を尋ねたり答えたりする表現を練習する。	・挨拶をする。 ・インタビュー動画を見せる（iPadとICT機器を使用）。 ・〇〇先生の一日がわかったか確認する。 ・絵カードと時刻を示す。 ・答えのチャンツのリードする（ジェスチャーも加える）。	・挨拶する。 ・動作や時刻を繰り返す。 ・たずねるチャンツをリードする。	・児童に身近な人物の一日を示す。 ・リズムマシンを使う（iPadとICT機器を使用）。
展開 28分	4 めあてを確認する。 5 スキットづくり活動 ・本単元の使用表現を確認する。 ・場面を決める。 ・Can-Doカードで使えるような表現を探す。 ・スキットをつくる。 ・他のグループのスキットを見て、自分たちのスキットを再考する。 ・各グループのスキットを発表する。 ・各グループの発表を聞く。	・オリジナルスキットをつくって発表しよう。 ・これまでの学びを生かしてスキットをつくることを確認する。 ＜本単元の使用表現＞ “What time do you～?” “I～at 0:00” ・Can-Doカードで使えるような表現を確認する。 ・Can-Doカードを活用したグループを取り上げ、モデルとして発表させる。 ・発表グループの工夫をみんなで確認し、他のグループの参考にさせる。 ・既習の会話表現やジェスチャー等を使うなど工夫している点を賞賛する。 ・場面や会話内容を聞き取っているか確認する。	・各グループのスキットづくりを支援する。 ・発話が苦手な児童に寄り添い発話を促す。 ・それぞれのグループの工夫点やスキットづくりができていたことを賞賛する。	・場面は、前時の中から選定する。 ・発話を強制しない ○生活を表す表現や時刻を尋ねたり言ったりする。（慣） ◎今まで慣れ親しんだ英語表現を使おうとしている（コ） ○自分たちで考えたスキットを伝えようとしている（コ） ＜発言・行動観察ふりかえりカード＞
7まとめ	6 ふりかえりを行う。	・英語を使おうとする態度やコミュニケーションへの積極的な態度、これまでの学びが生かされたこと、Can-Doカードを活用できたことなど良かったところを賞賛する。		

VII 結果と考察

＜作業仮説＞ 外国語活動の時間において、本時で学んだ表現をもとにスモールステップでスキットをつくる活動を行えば、英語で伝え合う楽しさや達成感を味わい、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されるであろう。

1 スモールステップでつくったスキットの実際から

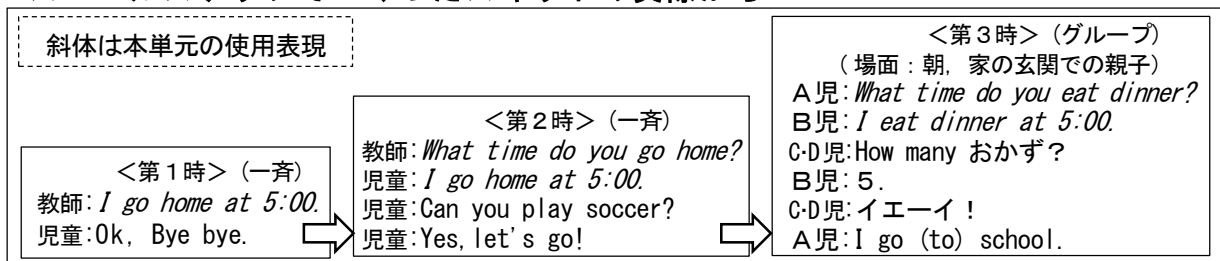


図2 第1時～第3時までのスキットの実際

【結果と考察】

図2のように本単元の使用表現である“*What time do you ～?*”を基に少しずつ児童の会話が増え、内容が広がっている様子がわかる。児童はこれまでに学んだ表現を駆使し、積極的にコミュニケーションを図ることができたと言える。

2 検証授業及びアンケートから

(1) 検証授業から

グループでスキットをつくる活動では、Can-Doカードを活用し、次の会話として適当な表現を考え、使おうとしている様子が見られた。さらに、他のグループのスキットを見て練り直す場面では、「あの会話を入れよう」や「ジェスチャーをまねよう」等と話し合い、友達のグループの良さを自分たちのスキットに積極的に取り入れていた。



図3はあるグループのスキットの実際である。簡単な英語を使い、同じ表現を一人一人が繰り返すことで会話内容を増やし、積極的にコミュニケーションを図っている様子がわかる(①②)。また、斜体以外はすべて児童が考え、加えた表現である。文法的な間違いはあるものの、これまで学んだ英語を駆使し、日本語も交えてなんとか相手に思いを伝えようとしている姿をみとることができる。

(全員)：Hello. (手を振りながら集まる) B児：Where are you go(ing)? A児： <i>To the bookstore.</i> ① C児： <i>To the コンビニ.</i> D児： <i>To the ice cream shop.</i> (全員)：イエーイ、Nice! A児： <i>What time do you go to ice cream shop?</i> 6? 10? 10でOK? じゃあ、Byebye. (全員)：(再度集まって) Hello. D児：Ice cream shop, let's go! C児：What ice cream? A児： <i>I like strawberry ice cream.</i> ② B児： <i>I like vanilla ice cream.</i> D児： <i>I like chocolate ice cream.</i> C児： <i>I like チョコチップ ice cream.</i> D児：オーマイガー、No money! Money please. C児：I have money. Here you are. D児：Thank you.	＜場面：友達とアイスクリーム屋さんに行く＞ 斜体は本単元の使用表現
---	--

(全員でアイスクリームを買って食べるジェスチャーをして終了)

図3 発表したスキットの実際＜第5時＞

さらに、授業後の児童の感想から、英語を駆使した様子（一線）や伝え合う楽しさや達成感（＝線）、次の活動への意欲（…線）をみとることができた（表2）。

表2 授業後のふりかえりカードの記述部分

- ・今まで使った英語を取り入れて、みんなに伝えることができました。
- ・習ったことが使えて伝わったのでうれしかったです。
- ・次は「いつ釣りに行く？」というのを言ってみたいです。
- ・今まで習ったことが日頃でも使えそうだったので、使ってみたいです。

(2) アンケートから(22名)

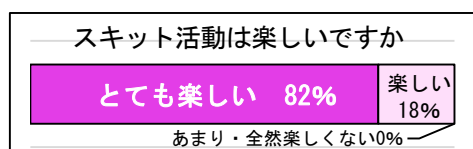


図4 スキット活動についてのアンケート

図4のようにスキットづくりについて全員が好意的な回答をし、その内82%がとても楽しいと答えた。スキットづくりの感想では、友達と相談しながらストーリーを考え、自分たちが考えたことを話せるから楽しいと答えた児童が多かった（表3）。

表3 スキット活動についての感想

- ・スキットの内容を考えたり、決めたりするのが楽しい。
- ・自分たちでスキットをオリジナルで考えてやるのが楽しい。
- ・自分が知っている英語を好きなだけ使えていい。
- ・英語で日頃の会話みたいに話することができるのが楽しい。

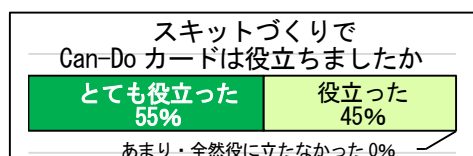


図5 Can-Doカードについてのアンケート

表4 スキットづくりでのCan-Doカードについての感想

- ・どんな言葉を使うことができるか振り返る時に役立った。
- ・忘れていた英語を思い出すのに役立った。
- ・前にどんな英語を使ったかとか、どんな英語が使えるようになったのかがパッと見てもわかるのでよかった。

図5のようにCan-Doカードはスキットづくりに全員役立ったと感じていた。Can-Doカードが会話の表現内容を広げ、これまでに学んだ英語表現を思い出す手がかりの一つとなったと言える（表4）。

本研究は「英語が使える」ということを「これまで学んだ英語表現をコミュニケーションの場で活用できる」と捉えた。

図6の「どの程度英語が使えるか」の項目では全員のポイントが向上した。スキット活動前は3ポイント(10ポイント中)と答えた児童が最も多かった(平均3.9)。しかし、活動後は6ポイント程度と答えた児童が最も多く(平均6.6)、3ポイントから10ポイント

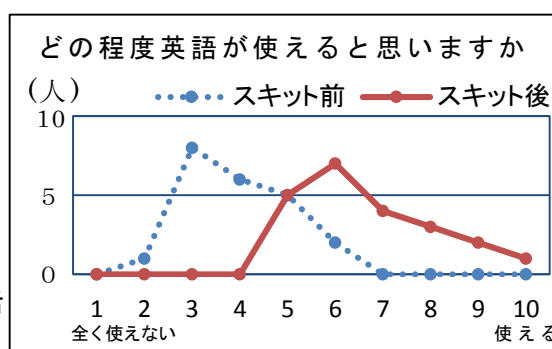


図6 スキット活動前後の自己評価

になったと答えた児童もいた。また、英語が使えると思った理由は「スキットでたくさんの英語を実際に使えたから」と答えた児童が最も多かった（表5）。

表5 英語が使えると思った理由

- ・スキットでたくさんの英語を実際に使えたから。
- ・今までわからなかった表現の仕方が、スキットをやってわかったから。
- ・スキットであまり使ってなかった英語を使えたから。
- ・スキットをすることで、今までの英語をふりかえって思い出したから。
- ・スキットをやりながら英語を使うととても覚えやすいから。

【考察】

児童はスキットづくり活動において、Can-Do カードを活用してこれまでの学びを振り返り、スキットの内容を考えることができた。そして、それを伝え合う楽しさを味わい、積極的にコミュニケーションを図ることができたといえる。さらに、英語を駆使して実際に使うことで、児童はこれまで学んだ英語が使える実感や自信がついたと考える。英語が使える実感や自信は次のコミュニケーションへの積極的な態度につながるものである。よって、スキットづくり活動を通して、児童はこれまで慣れ親しんだ表現を駆使し、伝え合う楽しさや達成感を味わい、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されたと捉える。また、Can-Do カードはこれまでの学びを振り返る手段として有効である。

3 抽出児童の変容から

D児は、外国語活動は楽しいと答えているが、日頃自分に対して自信がない等の言動が見られる。スキット活動前は「英語で人と話したり、聞いたりすることは好きですか」のアンケート項目に、「あまり好きではない」と答えていたが、活動後は「まあまあ好き」に変容した。そして「どの程度英語が使えるか」の問いも4ポイントから7ポイントに上昇した（図7）。さらに、第3時（図2）と第5時（図3）のスキットの実際

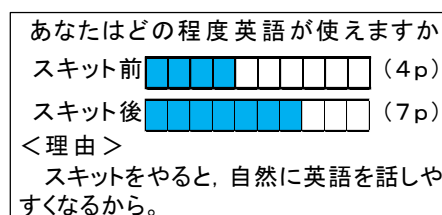


図7 D児の変容

を比較すると、第3時では「How many おかず?」などを友達と一緒に発話していたが、第5時では「To the ice cream shop.」「I like chocolate ice cream.」などを一人言うことができた。また毎時のふりかえりの言葉から、スモールステップでスキットづくりを行うことで、少しずつ意欲や自信がついてきていることがわかる（表6）。以上のことから、D児はスキット活動を通して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されたと考える。

表6 D児のふりかえりカード

第2時	第3時	第4時	第5時
上手く言えなくて意味のわからないところが多かったのでもっと練習したい。	スキットをしました。最初はいやだったけど、がんばれば簡単でやりやすかった。	スキットができたので、次から使えるようにしたい。	前回よりも緊張感をもたなかった。実際にありそうなことを表すことができたので、よかった。

VIII 成果と課題

1 成果

- (1) スキットづくり活動を通して、児童は英語で自分の思いを伝える喜びを味わい、学んだ英語が使える実感や自信をもつことができた。そのことが次の活動への意欲につながり、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成された。
- (2) スモールステップでスキットづくりを行うことで、児童は無理なくこれまでの学びを生かしたスキットをつくることができた。

2 課題

Can-Do カードを見ても、すぐに英語を思い出せない児童もいたため、これまでの学びを生かして英語を使う場や環境を日常的に設定する工夫が必要である。

《主な参考文献・引用文献》

『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』
『小学校英語活動実践の手引き』
『新しい時代の小学校英語指導の原則』

文部科学省 東洋館出版社 2010
文部科学省 開隆堂 2001
影浦 攻 明治図書 2008